



万引き女子学生 調教医療

松平龍樹
挿絵／孤裡精

立ち読み版



Contents

目次

第1章	発端	4
第2章	少女の目覚め 〜治療と調教〜	72
第3章	露出は看護婦姿 <small>のコスプレ</small> で	142
第4章	魔宴	214

登場人物

Characters

白瀬 小雪

(しらせ こゆき)

清芳学園中等部3年。可愛らしく整った顔立ちの美少女だが、内気で自分に自信を持ってない。お姫様に憧れる夢見がちな反面、内には被虐の性感を秘めている。

下呂井

(げろい)

小雪が通う清芳学園の保健医。カマキリに似た容姿をしており、女生徒から嫌われている。

伊東

(いとう)

下呂井と知己の、病院の事務員。コスプレ写真愛好倶楽部に所属している。

第1章 発端

白瀬小雪は学校からの帰り道、父母から長い付き合いのある本屋にいつものように入った。そして店番をしている顔馴染みのおばさんの様子に気づき、近づいて声をかける。

「おばさん、居眠りしていちやあ、またおじさんに怒られるよ」

「……ああ、ごめんよ、小雪ちゃん。学校からの帰りかい？」

口から落ちた寝よだれを拭きながら、寝惚け眼のまま、女主人は小雪に問いかけてくる。

「そうだよ。最近は遊び半分、ゲーム感覚で万引きする子も多いんだから注意しないと」

「そうだねえ、注意しないとねえ」

そううなずいて、女主人は小雪の顔をつくづくと眺める。

「……それにしても、キレイになったね、小雪ちゃん」

思いがけない賞賛に、小雪は一瞬、大きく目を見開いた後、破顔して手を振って、

否定する。

「イヤだ、おばちゃん。冗談ばっかり」

「冗談なモンかね。本当だよ。いつもお父さんと『最近、白瀬サン家のお嬢ちゃん
はとみにキレイになったねえ』って言い合っているんだよ」

「そんなコトないわ」

小雪はさみしげにかぶりを振る。

そして小雪はくるりと背を向け、店内を物色し始める。

(ありやりや)

本屋の女主人は少なからず驚いていた。

(本当に、キレイなのにねえ)

本心から、本屋の女主人はそう思っていた。タマゴ型の頭に、大きく澄んだ黒い瞳
や慎ましやかな紅い口、それに小さく愛らしい鼻などが整然と配され、それぞれが魅
力的な大きさと可憐さで、互いに引き立てあい、強調しあっている。ただ前髪が額か
ら眉毛にかかっていたり、後頭部より前の方が長めに切り揃えられた髪がやや内側に
カールしたりしていて、その素晴らしさを隠してしまっているのが何とも残念だった。
体型もこの年頃の少女としては十分以上で、太りすぎもせず、また痩せすぎでもなく、

すらりとした、若木を思わせるしなやかな肢体をしていて、濃紺のブレザーと、黒と白のタータンチェック柄のミニスカート、膝下まであるハイソックスが映え、魅力的だった。何より、名前のような白い肌がきめ細かで美しく、若さと健康をあたりに振り撒いている。確かに胸のふくらみはまだただが、十四歳という年齢を考えればそんなものではないだろうか？

何より十代半ばの、若木を思わせるしなやかな肉体カラダからは、ありきたりの制服などで抑えられるはずのないほどみずみずしく、弾けるような若さが放散されていた。二度とない、青春という季節をゆく少女は、老境をゆく女主人からすれば、それだけでまぶしく輝いているように思われる。

しかも、近在でも「成績や性格だけでなく、容姿でも標準以上でないと入学できない」と有名な私学の女子中等部に在籍しているのに、「そんなに卑下することないのにねえ」と思ってしまう。

(あとは、変なおトコにひっかからなけりゃあ、いいんだけどねえ)

そう思いながら、女主人は再びこっくりこっくりしかける。

「……………」

(あれれ?)

女主人の様子に気づいた小雪は内心アキレながらも咎めたりしなかつた。

それどころか、「よっぽど疲れているんだな」「最近では、本屋の経営も大変だって聞いているし」「おじさんがいないのも、新刊の配達などの得意先まわりなどで飛び回って忙しいに違いない」と考え、そして、「代わりに私が万引きするようなお客さんがいないかどうか、見張ってあげればいいか」などと思いを巡らせ、店内を時間をかけてゆつくりと物色する。

そうしてあちこち立ち止まって本を手にとったりしながら店内を一巡して、女主人にもう一度声をかけて帰ろうとして、カウンター近くの棚の前で小雪の視線と脚が釘付けになった。

そこには背表紙に『お姫様凌辱特集!!』と書かれた本があつたからだ。

その瞬間、小雪の心臓は弾け、頭の芯が爆ぜた。

胸が激しく高鳴るままに小雪は無意識のうちに店内に他の誰もおらず、店番のおばさんが座ったまま居眠りしているのを素早く見てとると、その新書版サイズの本を素早く手に取り、頁を繰る。果たしてそこには、小雪が期待したようなイラストが躍っていた。どうやらその本は、今流行のライトノベル形式のイラストレーションを多用した成人向け小説本であり、その特集本、アンソロジーらしかった。イラストに登場

するお姫様たちは年齢や体型、性格などは様々だが、いずれも気品に満ち、彼女たちはあられもない格好^{ポーズ}で、悪漢や魔物たちに辱められ、犯されていた。中には公衆の面前、領民たちや、時には父親である王様や母后たちの前で凌辱^{イラスト}されている構図^{イラスト}もあった。

どきどき。どきどき。

拍動がはつきりわかるほどの心臓の高鳴り、胸が張り裂けそうになるほどの息苦しさを自覚しながら、椅子に腰かけたまま完全に寝入ってしまったっている顔見知りのおばさんから隠すように、肩から掛けたバッグの中に見入っていたその本を滑り込ませる。その時小雪は、自分が本屋の女店主に忠告していた、万引き犯になったことなど完全に忘れていた。

小雪は居眠りしている女主人に挨拶もせずにそそくさと店を後にした。

小雪は自分が何をしたのか、よくわかっていなかった。いや、わかっていたのだが、「もうあの店には行けない」という思いと、「行かないと疑われないまでも怪しまれちゃう」という思いが頭の中でぐるぐる渦巻いていた。

だから、店から百歩ほど遠ざかり、緊張が緩みかけた頃、学校の制服である、濃紺のブレザーに包まれた小さな細い肩に手が置かれた時、本当に飛び上がり、心臓が止

まりそうになるほど驚いてしまった。

「キミ」

(ひッ!!)

「その制服は、清芳学園せいほうのモノだね？ 学生証を出したまえ」

その声に、全身をコーチヨクさせながら、振り返ると、ソコには小雪よりも頭ふたつ分は高い上背のある背広姿の細身の男が立っていた。

——!!!——

小雪にはその男に見覚えがあつた。

小雪が通う清芳学園の保健医である下呂井げろいだつた。

ずぞぞぞぞッ。

小雪は怖気オッケが立った。

彼は逆三角形の頭と細長い手足をぎこちなく動かす所作から、カマキリを連想させ、また名前から「ゲロキモ」と陰で呼ばれていた。その中年の男性保健医師は教員免許も取得しているのだが、どんな授業も受け持っていない。また、どんなクラスの担任にも副担任にもなっていないはずだつた。

名門進学校である清芳学園に通う小雪たちからすれば、下呂井は「誰も、特に女生

徒たちが行くはずもない保健室に勤めているだけ」の、中年保健医教師であり、生涯深い関わりあいを持つなど考えられない人間でしかなかった。

(見られた)

(見られた)

(本を万引きする所を見られた)

(しかも、あんな、恥ずかしい、ハレンチな本を万引きするトコロを見られた)

(しかも、よりによってみんなから『ゲロキモ』と呼ばれている、気持ちの悪いこの男に)

(どうしよう)

(どうしよう)

(どうしよう)

頭の中で行き場のない堂々巡りの思いがぐるぐると駆け巡り、心臓が早鐘を打つ。全身の皮膚という皮膚から気色の悪い冷たい汗がしぶく。

そんな下呂井に呼び止められた衝撃に全身を強張らせたままにいる小雪の小さな肩に手を置き、訝^{いぶか}しげに眉^{ひそ}を顰^{ひそ}めながら、下呂井は続けた。

「『清芳学園の生徒は常時この生徒手帳(学園手帳)を携行し、求められたら速やか

に提示すること」手帳にもそう書かれているはずだし、いつも読んでいるはずだよ?」

「あ……、あの……ッ」

ようやく口を開き、絞り出した声は涙にかすれ、上ずっていた。

「け……ッ、警察に行くんですか……ッ」

「それはキミしただよ」

その言葉に、小雪は思わず叫んでいた。

「黙秘しますッ!!」

それはTVなどで覚えた、自己防衛のためのセリフであったが、先ほどの「警察にいくんですか?」と「黙秘します」という言葉自体、小雪自身が何らかの犯罪に関与していることを自ら告白していた。

気が動転して涙声になっている小雪の幼くも整った面差しの前に下呂井は、仕方なさそうなため息をついた後、スマートフォンをかざした。

——!!!

「ひッ!」

小雪は自分の口からかすれた悲鳴が飛び出すのを聞いた。

そして、自分の顔から音を立てて血の気が引いていくのがわかった。

スマートフォン液晶画面に映し出されたのは、先ほどの小雪の姿だった。そう、馴染みの書店で万引きを働いている、シオルダーバッグに本をすべりこませようとしている現場の写真だった。本のタイトルすら判別できそうだった。

「……これ以上、手をかけるのなら本^{警察}に交番に行くよ」

その下呂井の言葉が決定打だった。

——!!!——

がくがく。がくがく。

「け……ッ、け……ッ、ケイサツは……ッ、警察だけはやめてください……ッ！」
ふるふるッ、ふるふるッ。

小雪は膝まで震わせながら、かぶりを振りたくり、小刻みに揺れる手で紺色のブレザーの内ポケットから生徒手帳を取り出し、下呂井に手渡した。

「ふむ」

差し出された小雪の生徒手帳を開き、小雪と交互に見やる。そこに貼られた写真で本人確認をしているのに違いなかった。

生きた心地のしない小雪に下呂井はさらに言葉を続けた。

「本を出したまえ」

!!!

下呂井が求めているのが何の本なのか、尋ねるまでもなかった。

下呂井は小雪に万引きした本を差し出せと言っているのだ。

ふるふる。ふるふる。

「ゆ……ッ、ゆ……ッ、許してください……ッ」

小雪は泣きじゃくった。

そんな小雪に、下呂井は素っ気なくかぶりを振った。

「そんなわけにはいかないだろう？ 警察沙汰にしたくないのなら、出しなさい」

そうまで言われては従うより他なかった。

（あああ……ッ、いやああ……ッ、見ないでええ……ッ）

両方の耳たぶから頭の中まで真っ赤にしながら、小雪はギクシャクした動作でシヨルダーバッグから先ほどの本を取り出し、下呂井に手渡した。すると、下呂井は内容を確かめたり、また下品でエロチックな表紙と消え入りそうなまでに縮こまっている小雪とを見比べもせず^{まじまじ}に踵を返す。

「少し待っていなさい」

下呂井はそう言うと、小雪を一人残し、その場から立ち去ってしまふ。

一人残された小雪は一瞬「逃げてしまおうか？」と考えたが、それが何の解決にもならないことにすぐに気付き、その場に立っているより他なかった。たとえ、この場から逃げ出すことができたとしても、後で問題が大きくなることは必定だった。

小雪の通う、清芳学園は中高一貫した人格教育を行う、名門の私立学園として近所に知られている。躑しつげという情操教育も徹底しており、今しがた下呂井が述べたとおり生徒手帳の携行は義務づけられ、毎朝各クラスのSHRショートホームルームで確認し、その一部をその日の当番になっている生徒が朗読する習慣がある。もし、その場で自分の生徒手帳を保持していなかったり、紛失した場合、検察（警察ではナイ！）の尋問まがいの取り調べが行われるというのが専らもっぱの噂ウワサだった。

（どうしよう？ どうしよう？ どうしよう??）

不安と絶望がないまぜになって、小雪の頭の中をぐるぐると駆け巡る。厳しくもあるが普段はとても優しい母親の心配顔と、自分を本心から可愛がってくれる父親の困惑した顔が、熱く重たくなったまぶたの裏に浮かぶ。

（……どんなコトをしても、（生徒）手帳を取り返そう。……どんな犠牲を払っても、このコトを秘密にしてもらおう）

(そう、どんなコトをしても！)

悲壮な決意を固め、自分でもわからない理由でBカップのブラジャーの下で縮こまったように乳首を尖らせる小雪の、霞みがちになる視界にオトコ物の細長い靴が入ってきた。下呂井のモノだった。

「待たせちゃったね」

下呂井はそう言ったが、時間にして数分ほど、十分にも満たなかったに違いない。

しかし、下呂井は小雪のただならぬ気配に気が付いた様子だった。

はあ。

ひとつため息をつくと、ハンカチを差し出してきた。

「涙を拭きなさい。それとも自分のを使うかね？」

「……」

小雪は黙ったまま、頭を振り、そして大きくうなずいた。そして黒と白のタータンチェック柄をしたスカートにあるポケットから、ハンカチを取り出してきて、目元をぬぐった。そんな様子を見ながら、下呂井は声をかけてきた。

「少しだけ話をしよう。ついてきなさい」

思いがけないほど、穏やかな声調に気づいた小雪が顔を上げた時、下呂井はすでに

歩き出していった。

小雪は後を追った。

下呂井が小雪を連れ込んだのは、ホテルなどではなく、『談話室』という名前の、カンバンを出した長い間話し込みの出来る喫茶店だった。小雪としては連れ込み宿などではなく、一安心したが、それでも油断できなかつた。もちろん、校則では生徒の立ち入りは禁止されているが、保護者同伴なら構わない。この場合、やはり下呂井が、小雪の保護者というコトになってしまうのだろう。小雪としては「ゲロキモ」という、芳し^{かんば}からざる評判のある男性教師の被保護者になるコトは容易に認めることはできないが、ココは我慢しなければならなかつた。

下呂井は受付で身分証明書を提示し、個室を求めた。幸い空きがあり、二人は店の一角にある個室に通された。

入室するやいなや、下呂井は「ボクはブレンド。この娘にはココアを」と素早く小雪の分まで注文して、名門私学の制服を身にまとっている少女に興味津々でいる店員を追いかつた。

小雪が椅子に座ると、差し向かいに座つた下呂井が、机の上に小雪の生徒手帳を差

し出した。

「返しておくよ」

何の条件も出さず、また何も聞かずにいるうちに自分の手元に返ってきた、戻ってこようとしている生徒手帳に小雪は少なからず驚いていた。しかし、下呂井はさらに小雪が驚くものを差し出した。

それは平たい袋に包まれたモノだった。

中が分からず、表情の選択に戸惑っている小雪に、下呂井は実にさりげなく、その正体を告げた。

「さっきの本だよ。ちゃんと買ってきたよ。レシートもある」

!!

そう言つて下呂井は驚愕を隠せずにいる小雪に差し出した本の上に、レシートを乗せた。

下呂井の言葉通り、小雪にとって見慣れた印字のあるレシートだった。

小雪にとっては想像していた事態とはまったく異なる成り行きに戸惑わずにはおれない。

「なぜ、キミは万引きしたんだね!？」となぜ詰問しないの？」

「親や学校に知られたくなかったら、俺の言うことをきけ」って、なぜ脅迫しないの？」

などと、逆に問いただしたかった。

また、そうしようと思っていた寸前、注文オーダーしていたココアとコーヒーが運ばれてきた。

「お待たせしました」

「……」

小雪は押し黙ったまま、自分の前にココアが置かれるのをじっと見ていた。その様子を下呂井が柔らかな笑みを浮かべながら、注意深く観察している。

「ご注文は以上で宜よろしいでしょうか？」

「ああ」

「……」

「それではごゆっくり」

好奇の視線を小雪と、その差し向かいに座っている中年男に走らせながら、ウェイターは丁寧に頭をさげ、部屋から出て行った。

ふう。

下呂井が大きく上に息を吐き出した。その様子がいかにもカマキリが一服しているようで、なんだかおかしかつた。

「このココアは、まあ、飲めるよ」

下呂井はそう小雪に勧めた後、怪訝な表情を浮かべた。

「ココア、嫌いだったかな？」

「……」

小雪は小さくかぶりを振った。

「よかった。それじゃあ、白瀬……クンでいいかな？」

小雪は『キタ』と思った。そして全身を強張らせた。これからの展開が妄想され、目頭が熱くなり、心臓が激しく高鳴る。

はあ。

緊張感と警戒心を全身から漲みなぎらせている女子学生に、下呂井は大きなため息をついてみせる。

「……勘弁してくれないかなあ」

そののんびりしたとも言える口調に、小雪は視線を上げ、目の前にいる教師を見つ

めた。『ゲロキモ』と呼ばれて、理不尽に嫌われている男性教師は逆三角形の頭部に困惑の表情を浮かべている。どうやら、本心から困っていて、当惑している様子だった。

「別にボクは、キミを、白瀬クンを取り調べしようとか、脅そうとか、するつもりはまったくないんだよ」

そう言うてから、下呂井は首をひねり、剃り残しのある頬を撫でた。

「……そうだねえ、言ってしまうえば、どうやったら、ボクが責任逃れできるのか、一緒に考えてもらえないかなあ」

「……?」

下呂井の言葉に小雪は今度はその整った面差しに胡乱げな、胡散臭げな表情を浮かべた。

はあ。

自分が通う勤め先である、学校の中等部3年の女子学生の反応に、困り切った表情で下呂井は大きなため息をついた。

「だって考えてごらんよ。自分の学校の可愛らしい女生徒が、書店に入るのを見かけ、その店先で雑誌を立ち読みしていたトコロ、その女学生が挙動不審な態度をとり、女

店員が居眠りしているのを幸いに、手にした本を自分のバッグに入れたんだよ。取り締まり、ツというか、問いたださないとワケにはいかないだろう？」

「……」

なおも押し黙り続け、緊張と警戒を解こうとしない、自分の学校の生徒に手を焼いたように下呂井は続けた。

「はつきりと言って、このままキミ、……を帰しても構わないんだよ。ボクにしてみればね」

下呂井はそこで、もう一度言葉を切り、机の上に両肘をついて、両方の手を組み合わせた。

「でも、最低限度の説諭、とかさ、はしなくちゃあ、いけないだろう？ 勿論、警察には言わないよ。キミの家にも連絡しない。キミの担当の先生にも言わないさ。ただ、風紀主任の黒岩^{くろいわ}センセイくらいには簡単にも告げておかないとね。さもないと」

『自分の責任になっちゃう』と下呂井が言おうとした途端、小雪が鋭く言葉を発した。「誰にも言わないでください！」

小雪の鋭い、悲鳴にも似た発言に一瞬驚いた表情を作ったが、下呂井はすぐに安堵した様子だった。

「……わかった。黒岩センセイにも黙っておこう」

「ありがとうございます……」

下呂井の言葉に小雪は消え入りたげな風情でこうべを垂れた。

そして小雪は胸を突かれたような表情を浮かべた。そして、今回の出来事が小雪だけでなく、それを見つけた男性教師の方にも非常な緊張を強いているのを知った。しかし、それでも主張しなければならぬコト、言っておきたいコトはあった。

「本当に誰にも、誰にも言わないでください。他の誰かに知られたりしたら、本当に困ってしまうんです……」

脳裏に優しい両親の困惑顔が浮かぶ。級友たちが遠去かっていく姿が見える。ようやく入ることができた、憧れの学校の風景が消えかかる。

『どんな行為でもしますから』

語尾が涙まじりに震え、小雪はこれ以上の言質をとられないような言葉を出さずにいるのがやっとだった。

はあ。

下呂井は何度目かのため息をついた。

そして天井を睨みながら、途方に暮れたようにつぶやいてみせる。

「……わかったよ。黒岩センセイにも黙っておこう」

「ホントウですか!? 嬉しい!」

下呂井の発言に、手を叩かんばかりに喜び、小雪は身を乗り出してくる。

「……現金だねえ」

当惑口調で降参をあらわにし、下呂井はため息交じりにうなずいていた。ただ、教師として、勤め人として責任を回避する意味でも釘を刺すのを忘れない。

「ああ、ホントウだとも。ただ、ボクの質問にいくつか答えてくれたらね」

そう言うってから下呂井は手のひらをテーブルの上に差し出した。

「その前に、まず、ココアを飲みたまえ。冷めちゃうよ」

「はい」

小雪は素直にうなずき、温かく黒い液体に満たされた、かなり大ぶりのマグカップを両手に取った。

事実、そのココアは結構美味しかった。少なくとも、小雪の緊張を和らげる効果はあったようだ。頬っぺを紅くして人心地つく小雪に、下呂井は「かなり興奮していたみたいだね」と微笑みかけ、さらに「コレを吞んでごらん」とビジネスバッグから取り出したカプセルタイプの錠剤を差し出した。「コレを吞むとさらに気分が落ち

着くよ」との言葉も添えた。

小雪はしばらく考えた後、素直に飲み下した。

『今は、今だけはこの男に従おう』と考えたのだ。

自分よりも二十歳も若い少女のか細く、綺麗な白い喉首が確かに動くのを見届けた下呂井はいずまいを正した。

一方の小雪は、喉元を過ぎて胃の中に落ちた葉が溶け出すと、なんだかポカポカしてくるのを感じた。肉体の火照りを感じる小雪に下呂井が話しかけてくる。

「つで、あらためて聞くけれど、なぜ白瀬クンは、あの、この本を、ま、いや、欲しかったのかね？」

小雪はちよつと吃驚した。丸く目を見開く小雪に下呂井が畳みかける。

「……まさか、転売目的だとは思わないんだけど」

ぶんぶん。

小雪は大慌てでかぶりを振り、尖った声を絞り出す。

「違います」

最近、小雪が本屋の女主人に言ったように面白半分スリル半分、それに小遣い欲し

さに本を万引きし、書籍の中古売買専門店に持ち込む輩やからが跡を絶たない。それが中小書籍店の経営に少なからぬ打撃を与えているのは小雪ならずとも知っている。そんな無法な真似ふるまいを両親から知り合いである馴染みの書店で小雪ができるわけがなかった。

下呂井も大きくうなずいた。

「っだろうねえ。そんなコトしても大したお金になるわけじゃないし。そもそも転売するのが大変だ」

「……」

小雪も神妙な面持ちでうなずく。

そう、たとえ転売目的で万引きしたにしても、成年向きの本を未成年の、学生である小雪が売却するのは難しい。成年である大人の手を通すか、インターネットでもそれなりの工夫を凝らさなければ不可能だ。そして、目の前にいる中年の男性教諭の質問は、当然と言えばあまりに当然に過ぎる質問なので、きちんと、正直に答えなければならぬ、と考え、ある程度の覚悟を決めた。

ごくつ。

唾を呑み込みながら、頬を紅潮させ、おもむろに端正な紅い口を開く。

「……あの本の表紙を見た途端、どうしても中を見たくなくなっちゃって……、『見なく

「ちゃあ」と思つて……、……いや、そんなふうを考えるヒマもないくらいに、思わず手に取つていたんです。……そしてパラパラめくつて、綺麗な可愛らしいお姫様が、悪者に捕まつて、あの……、その……、ヒドイ目にあつてゐるのを見た時、頭の中が真っ白になつて……、自分でも知らないうちに……、ホントウなんです！ 自分でも知らないうちに、カバンに入れて、店を出ていたんです……」

「ふうむ」

もうちよつとで泣き出しそうになるくらい、悲愴な面持ちで述懐をする、目の前にいる女子学生の答えに下呂井は顎を撫でた。

「ナルホドね。よくわかつたよ」

「いったん、そう言つておきながら、新たな質問をする。

「……ケド、少しばかり、疑問が残るなあ」

「？」

怪訝な表情を浮かべる小雪に、下呂井が新たな質問をブツけてくる。

「……だつて、そうじゃないかね？ 白瀬クンのような年頃の女の子が、お姫様に憧れるのは理解できるけれど、相手はやつぱり、王子様、所謂白馬の王子様いわゆるなんていう、カッコのいいオトコの子だろう？ 何も好き好んで、悪者たちに襲われている小説本

を手にとらなくとも……」

まことにもっともな、当然に過ぎる、下呂井の疑問だった。

小雪は、名前通り、白い、透き通るほど白い、きめ細かな肌に血を昇らせながら、下呂井の質問に答えた。さつき下呂井から渡された葉を吞んでからというもの、小雪の肉体は火照り、熱を帯び、湿りだしていた。

小雪は頬の熱さだけでなく、体の芯から熱く痺れてくるのを自覚しながら、ためらいがちに唇を開いた。

「……だって、私、そんな……、王子様が現れるほどキレイじゃないし……、可愛くもないし……」

「はあッ!？」

少女の弁明に下呂井は素っ頓狂ともいえる、大きな声を出した。荒らげた声と表現してもよいかもしれない。少なくとも、個室、別室でなければ、周囲の視線を集め、小雪が困惑していたに違いないほどの大きな声だった。

「キミは充分にキレイだし、可愛いよ」

ぶつきらぼうな口調で言う下呂井の言葉に小雪は力いっぱいかぶりを振りたくる。

ぶんぶん。ぶんぶん。

「いいんです。そんな、とってつけたみたいに慰めてくれなくても……」

そう自虐的に言う少女の声は涙に濡れていた。

「おいおい」

下呂井があわてていた。思いがけない愁嘆場に困惑する男性教師を尻目に、小雪は本気で泣き始める。

「私は、可愛くないし、キレイじゃないから、どうせ、王子様なんて……、現れないにきまっています……」

ぐすぐす。

鼻を鳴らして泣きあえぐ小雪に男性保健医師は狼狽し始める。

さらに小雪は泣きじゃくり、訴える。

ぐすぐす。ぐすぐす。

「……そ、……それに、……それに」

思いがけない展開に絶句する男性教師を置いてけぼりにして、ミドルティーンの子学生はなおも、言いつのる。

「……どうせ、魔物たちや、悪者たちだって、私を相手にする……、相手にしてくれ、襲おう……だなんて、考えやしないんだわ……」

「……ええつとッ」

下呂井は完全に困惑していた。いくらこの年頃の少女の理想が高く、自分が取るに足らないような存在に感じられることが多いとはいえ、目の前にいる少女の思い込みは、あまりにも度が過ぎるように感じられる。

(女の子なら、いや女性であれば、誰もが持っている、お姫様願望シンデレラは人並み以上にあ
るのに、自分を「ツマンナイ女の子」だと思っている、思い込んでしまっているため
に、白馬の王子が現れるのを期待するのではなく、悪漢たちに襲われるコトを夢想して
いるのか。そして、王子様に見向きもされなくとも、悪漢たちが襲うようなくらいは、
自分に価値があつてほしいって、思っているのか……)

(ずいぶんとややこしい、歪みまくつた、複雑骨折した心理というか、趣味だなあ)
下呂井は、少女の心理を分析し終えた後、
ぞくッ。

背筋に戦慄が奔るはしのを感じた。それは
『この少女を自分のモノにできるかもしれない』

という、暗い欲望の発露だった。それはこの名門校に赴任してから、そして生徒たち、とりわけ女生徒たちから『ゲロキモ』と陰で噂されているのを知ってから、ずつ

と封印してきた、それゆえに鬱屈していた思いだった。それは昏い欲望、抑えてきた本能だったのかもしれない。

ぐすぐす、ぐすぐす。

「……ど、……どうせ、わ……、わ……、わたしなんか……、わたしなんか王子様どころか……、魔物たち……、悪者たち……、ダレにも相手されずに終わるんだわ……。一生、誰にも相手されずに……、誰にも襲われやしないんだわ……」

目の前にいる男性教師の雰囲気が変わったのも知らず、女子学生はなおも泣きじゃくり続ける。

「そんなコトはない。キミにはきつと、キミにはふさわしい、イイ男性が現れるよ」

下呂井は自分の胸の奥にしまっていた、ずっとしまっていたままにいるハズだった、暗い欲望を押さえつけるように腕組みしながら、少女の言葉を否定する。そんな男性教師の葛藤も知らずに、女子学生はかぶりを振る。

ぶんぶん。

「ウソ……。そんなのウソよ……。だって、私、可愛くないし、キレイでもないんだもん……」

「そんなことはない。キミは可愛らしいし、キレイだよ。そして将来、もっとキレイ

に、美人になるよ」

ぶんぶんぶん。

小雪は力強くかぶりを振りたくった。

短い、艶やかな栗色をした髪が揺れ、舞う。

「そんなコトない……。私、キレイじゃないもの……」

ぶっん。

下呂井は自分の肉体カラダのどこかで何かナニが切れる音を聞いたような気がした。それは理性かもしれないし、人前にさらすことを避け、抑えつけていた欲望の籜タガかもしれないなかつた。

下呂井は立ち上がり、自分でも予想しなかった、できなかつた速度と大胆さで、机越しに少女の頭を自分の胸に抱きすくめた。

!!!

突然の出来事に悲鳴も出せずにいる少女の耳に、下呂井がささやきかける。

「キミは本当に可愛らしくてキレイだ。魅力的だよ。二人つきりしていると、こうして襲いかかりたくなっちゃうほどね」

「……………」

ただ、ただ呆然とすくんでいるばかりの女子学生に下呂井は続けた。

「なんなら、このまま、本当に襲っちゃおうか？」

ピクンッ！

少女の華奢な体が下呂井の腕の中で跳ねたが、少女は抵抗したり、悲鳴をあげようとはしなかった。

ごくっ。

下呂井は固くなった唾を飲み込み、そして乾いた唇を湿らせてから、さらなる言葉を吐き出した。

「いっそのこと、このまま、ココで犯してあげようか？」

ぶるぶる。がたがた。

少女の体が震えていた。

下呂井は『やりすぎたか？』『いくらなんでも性急すぎたか？』と思ったが、少女はなおも悲鳴をあげようとせず、また、逃げ出そうともしなかった。

それどころか、小雪は呼吸を荒らげ、下呂井にもたれかかってくる。

今、小雪の脳裏にあるのは、可愛らしいお姫様がイヤらしい化け物に襲われて犯される、エロゲーであるような強姦場面だった。それは小雪が夢に見た憧れの場面だっ

た。

「……今、……ココで……、センセイに……、襲われる……?」

小さくつぶやいた少女の口調に、畏れとともに期待が強くにじみ出ているのを下呂井は聞き逃さなかった。

「そう、キミは、あまりにも魅力的だから、可愛いから、キレイだから、ココでボクに犯されるんだ」

がくがく、がくがく。

下呂井の言葉に少女の肉体が小刻みに震えていた。それはまるでうなずいているかのようだった。

「ああ……」

果てるようにつぶやく少女に下呂井はなおも続けた。

「白瀬小雪は、あまりにも魅力的で、可愛らしく、キレイだから、偶然万引きしたのを目撃されたのをネタに強請^{ゆす}られ、ボクに、みんなから『ゲロキモ』と忌み嫌われている、品性下劣な男性教師に犯されちゃうんだ」

「あああ……」

ぶるぶる、がたがた。

少女のわななきは止まらない。しかし、なおも小雪は叫んだり、逃げようとはしなかった。

万引きをネタにこの嫌われ者の男性教師に犯されると聞かされた小雪の胸は絶望で塞がる。しかし、その絶望には甘酸っぱいトキメキが伴っていた。

（私は、知り合いのおばさんの本屋で万引きした罰として、この、気持ち悪い、中年の男性教師に犯されて、処女を奪われちゃうんだわ）

（たかが、本一冊のために、人生を台なしにされちゃうんだわ）
ぶるぶる。わなわなッ。

（でも……ッ、でも……ッ、仕方がないんだわ……ッ）
（それが私の運命なんだもの……ッ）

今小雪が置かれている状況が、小雪が夢見る、魔物たちや悪漢に襲われたお姫様の窮地ピンチにぴったりと重なる。

それは歪みに歪んではいたが、ある意味乙女らしい感傷だった。

下呂井はもう一度小雪を抱きしめながら、愛らしい耳たぶに息を吹きかけ、同じ言葉を繰り返す。

「白瀬小雪というお姫様は、とつても魅力的チャーミングで、本当に可愛らしく、キレイだから、

万引きをネタに強請^{ゆす}られて、学校中から『ゲロキモ』と蔑み、嫌われている、おぞましい男性教師であるボクに今からここで犯されちゃうんだよ」

「……………」

下呂井の言葉に少女はすぐにはうなずかなかった。やはりためらいがあった。しかし、もはやかぶり^{イヤイヤをし}を振つたり、席を立てて逃げ出そうともしない。

あと一言が欲しかった。

下呂井に抱きすくめられるままにじっとしていたが、ゆっくりと、おもむろに二片^{ふたひら}の花弁^{はなびら}を思わせる唇を開く。

「……ま、万引きのコト、黙っていてくれますか？」

それは、下呂井に犯されることを許容する言葉であり、期待への表明ですらあった。小雪の言葉に下呂井は少女の身体を抱きしめたまま、全身でうなずいた。

「ああ、もちろんだとも」

「……誰にも言わないでくれますか？」

「もちろんだとも、誰にも言ったりやしないよ。キミが体を差し出してくれるのならね」

下呂井が全身でそう答えるのを聞きながら、小雪は大きくうなずいた。

その拍子に大粒の涙がこぼれた。

ぶるぶるッ、がたがたたッ。

小雪は自分の小さな体が大きく小さく波打つのを感じながら、胸の奥で一人言ちる。
（……私は本を一冊万引きしたのが露見しないように、自分自身の肉体と貞操を差し出すんだわ）

（これで、憧れの、穢れのないお姫様が、大した罪もないのに魔物たちに犯されるのと同じ境遇になれるんだわ）

歪んだヒロイズム、倒錯したお姫様願望に陶然と酔い痴れる小雪を抱きしめながら下呂井が小雪にとって決定的とも言えるセリフを吐く。

「そう、キミがボクに抱かれさえすれば、誰にも知られずに済み、お父さんやお母さんも悲しまなくてすむんだよ」

——!!——

がくがく。

果たして効果は靦面だった。

「……わたしさえ、犠牲になれば、誰も、お父さんも、お母さんも悲しまなくて済む……」

『両親を悲しませずに済む』という目的は少女のヒロイズムを甘酸っぱく^{くすぐ}擦り、破滅さえもいとわぬ、いや嬉々としておのが身と運命を差し出す自己犠牲を促す免罪符だった。

(堕ちたな)

下呂井はそれ以上のことは何も言わずに、机の上のカップや調味料やナプキンなどを入れたトレイを手早く片付け、言葉によらず、動作で導いて、小雪を机の上に仰向けに寝かせる。

「……………」

もはや何も言おうとせず、小雪は下呂井のなすがままに身を任せていた。可憐な女子学生の、華奢な肢体が談話喫茶の個室、その密室の空間に置かれている机に上向きに寝そべっていた。小雪の体は小さかったが、それでもそのすべてを机の上に乗せることは不可能だった。幅50センチ、長さ1メートルほどの四角い机の端から膝から下は完全に、落ちてしまっている。清芳学園の制服であるミニスカートの、黒と白のタータンチェック柄と黒いニーソックスの間にある小さな膝小僧が何とも言えず愛らしく、また可憐だった。

「あああ……………」

顔をそむけ、呻くだけになってしまっている女子学生を前に下呂井は上着を脱ぎ、ネクタイを外した。

「キレイだ。本当にキミはキレイだよ」

少女の美しさ、可憐さを讃嘆するように下呂井は言い続ける。

「なぜ、自分を『キレイじゃない、可愛らしくない』って思い込んでいるのか、まったくわからないよ」

下呂井は小雪が着ている濃紺のブレザーのボタンを外し、胸前を左右にはだけた。そして学年を示す、真紅の細いネクタイをほどき、真っ白なブラウスのボタンをはずしにかかると。

「……イヤ」

少女の言葉に下呂井の手が止まる。

次の動作に戸惑う男性教師に女子学生が顔を、真っ赤に染まったあどけない面差しをそむけたまま、つぶやく。

「や……ン……やっぱり、恥ずかしいんです……ッ」

処女の言葉に下呂井は破顔する。そしてすぐに表情を引き締める。

「でも、キミは罰を受けなくちゃあ、いけないんだよ」

下呂井の優しく諭すさとような言葉に小雪はこっくりとうなずいた。

「そ……ッ、それは……ッわ……ッ、わかつています……ッ」

「それじゃあ、おとなしくしているんだよ」

「はい……ッ」

小雪はうなずき、囚われのお姫様の心境を思いやり、自分自身に重ねる。

歪んだヒロイズムに酔い、抵抗をやめた小雪に下呂井が手と体を動かし始める。

純白のブラウスの胸前をはだけ、

「あ……ッ」

現れた可愛らしい、刺繍もフリルも柄もなく、飾り気のない、淡い肌色をしたBカップブラジャーの間に顔をうずめた。

「キレイな、可愛らしい乳房だ」

すりすり。

下呂井は、顔を少女の小さな胸の間にうずめ、頬ずりをする。

「本当に可愛らしくて、キレイだよ」

そう言った後、下呂井は少しだけ身を起こし、少女の胸を締め付けていたブラジャーのフロントホックをはずした。

ぷるんっ。

少女の小さな乳房が所有者の若さが弾けるかのようにして現れる。

真っ白な、それこそ少女の名前通り、純白の雪に覆われた丘のようななだらかなふくらみの頂きで、淡い紅色をした尖端がちんまりと縮こまりながら震えている。

「本当にキレイだ」

不意に下呂井は目元だけでなく、言葉までが涙で湿りかけてしまうのを感じた。

下呂井は自分の動揺胸の裡を悟られないためにも、少女の華奢な肢体に自分の体を覆いかぶせる。そして少女の細い骨組みをした鎖骨から首筋へと唇を滑らせる。

ちゅっ。ちゅちゅちゅっ。

「本当に食べちゃいたいくらいだよ」

讚嘆だけでなく、感謝の気持ちをごめた、淡い口づけを繰り返しながら、ささやく下呂井の言葉に少女のきめ細かな、白い肌が細かく、静かに震える。

ぶるぶるっ。わなわな。

「……あああ、わたし、ホントウに、食べられちゃうの？」

その言葉は、不安や恐怖を表しているのではなく、期待のはっきりとした表明であり、さらに言ってしまうえば、誘いですらあった。

ちゅッ、ちゅちゅッ。

下呂井は少女の絹のような素肌を味わいながら、ズル賢そうな嗤わらいを閃かせた。

「そうだよ、キミは、白瀬小雪ちゃんは、とっても魅力的で、可愛らしくって、キレイなもんだから、偶然万引きしたのを目撃した卑劣な男性教師に脅かされ、誰からも『ゲロキモ』と忌み嫌われているボクに犯されちゃうんだよ」

そこまで言いさした時、下呂井は思いついて、言葉をつないだ。

「そうだよ、まるで、あまりにも魅力的なので、悪者ワルモノたちに誘拐されたお姫様みたいだね」

———
!!!

「お姫様……」

果たして効果は絶大だった。

そうつぶやいた少女の全身から力という力が抜けた。
はらり。

女生徒の変化を下呂井は見逃さなかった。少女の愛らしい、貝殻のような耳元で熱っぽくささやきかける。

「そうだよ、白瀬小雪ちゃんは、『白瀬小雪』という名前のお姫様は、とっても、と

つても綺麗で可愛らしいから、悪者にとつ捕まって、犯され」

そこで下呂井はいったん言葉を切り、ためらいがちに、しかし、しっかりとした言葉
を吐き出した。

「食べられちゃうんだ♡」

ズッキューン
!!!

ぞくッ！ ぞくぞくぞくぞくッ！

「あああ………ッ、あああ………ッ」

少女の変貌ぶり、変化はまさしく見物だった。下呂井が放った言葉は、少女に感銘
だか感動だかわからないが、その深層意識に凄まじい衝撃を与えた様子だった。

そうと知って下呂井は有頂天になる。

ぞくッ。

（こいつはスゴイぞ。どうやら、この娘は、この娘自身知らなかったに違いないけれど、
強烈な被虐願望、襲われたい、強姦されたいっていう、願望をいだいていたんだ）
（それはお姫様願望の相当歪んだ変形、畸形といえる）

（そして、ボクは、この少女を好きなように、調教できるぞ）

「キミは全く素晴らしいよ」

その言葉に、下呂井に組み敷かれた華奢な肢体が大きく、小さく、わななく。

それを押さえつけながら、下呂井は愛撫を始めていく。少女の胸肌に淡い口づけを繰り返しながら、時折しゃぶってみせる。

あわあわつ。ちゅッ、ちゅちゅッ。ぴちやぺちやッ。

「あああ……ッ、あああ……ッ」

小雪は哭なき悶えた。

下呂井の舌に触れると、そこがゾクツと震え、熱くざわめいてくる。その唾液が乾く前に、沁み込んできて、小雪の体の芯を熱く痺れさせる。

（あああ……ッ、あああ……ッ、まるで本物の魔物か触手にもてあそばれているみたい……ッ♡）

得体の知れない化け物に襲われ、舐めしゃぶられているような感覚は、少女の被虐願望を心地よく酔わせてくれた。

随喜の涙を流して泣きあえぐ小雪の白いブラウスはさらに大きく左右にはだけられ、あらわになったほつそりとした肢体が撫で回される。

さわさわッ。

「あああ……ッ、いやアアア……ッ」

懊惱おうれうの小さな呻き声をあげる少女の素肌は絹のようになめらかで、心地よかった。しかも、その素肌が、下呂井の愛撫に応じて熱を帯びて、しっとり潤いながら、甘い芳香を立ちのぼらせてくる。

下呂井はその少女の甘い匂いに誘われるようにして、小さな乳房を優しく、ゆつくりと揉みながら、その淡い先端に口づけ、

ちゅッ。

「あッ」

口に入れる。

「うッ、ううんン……ッ」

軽く身をよじるばかりの少女の反応に下呂井はその小さく縮こまった先端をしゃぶり、

ちゅちゅちゅちゅッ。

時には唇できつく締め付け、吸いたてる。

ちゅッ、ちゅちゅちゅううッ。

「あッ、ああンン……ッ」

小雪は切なげに身をよじり、鼻を鳴らした。しかし、肩から力は抜けてしまってお

り、何ら抵抗しようとはしなかった。

さらに下呂井は少女の乳首を口の中で転がしたり、

ちゅぱちゅぱッ。

「くふううんん……ッ」

時には優しく歯を立て、甘噛みしたりする。

くちゅくちゅッ。

「うッ、ううう……ンンッ」

華やいだ、甘えた吐息を漏らす中等部に通う女学生の幼い、両方の乳房をかわるがわる、両手と口を使って思うさま堪能すると、その小さなふくらみを揉みながら、その下、みぞおち鳩尾から臍、腹部へと舌を滑らせていく。

ちゅッ、ちゅるるるるッ。

「あ……ッ、ああん……ッ」

少女とて、コトの成り行きに戸惑うばかりであったに違いない。しかし、彼女はそれから逃れようとしたり、あらがおうとはしなかった。ひよつとしたら、こんな事態は少女自身が望んでいたのだと、無意識のうちに悟っていたのかもしれない。

ちゅちゅちゅちゅちゅッ、ちゅるちゅるちゅるルンンッ。ちゅつづッ、ちゅつぱッ、

ちゆるるるるッ。

少女の引き締まった腹部に刻みこまれた、愛らしい窪みを舐めしゃぶりながら、下呂井はできるだけだけ自然な動作で、タータンチェック柄のスカートの下に両手を差し入れ、そして少女の小さなお尻を覆っている下着を脱がせる。

「あ……ッ」

小雪が短い、涙を伴った悲鳴をあげた時には、少女の最後の砦は、小さく丸まった布地になって、ヒレツな男性教諭の手の中に握られてしまっていた。

(あああ……ッ、わ……ッ、わたし……ッ、この男性教師に……、よく知らない……ッ、誰^{みんなから}からも忌み嫌われているオトコに犯されちゃうんだわ……ッ)
ぞくぞくッ。

破滅と転落への予感には甘酸っぱい期待と不安が入り交っていた。

(わ……ッ、わたし……ッ、わたし……ッって、可哀相……ッ、可哀相だわ……ッ)
ぐすぐすッ。

小雪は涙ぐみながらにあえいだ。

(で……ッ、でも……ッ、でもでもデモ……ッ、し……ッ、仕方ないの……ッ)
(だ……ッ、だって……ッ、だって……ッ、知り合いの、お店で万引きを

……ッ、しかも、オトナのオトコのヒトが買うような、日な本を……ッ、盗むような、悪い娘コなんだもの……ッ)

(こんな目にあつて当然だわ……ッ。罰せられて当たり前なのよ……ッ)

少女が胸の裡で被虐的な自己陶醉ナルシズムに酔っているうちに、下呂井は、裸になった、裸にした少女の下半身に愛撫を始めていた。

ぴちゃぺちゃッ。

少女の下半身は上半身以上に潤い、甘い芳香を放ち、熱を帯びていた。

しつとりとした乙女の柔肌に、下呂井は口づけ、

ちゅッ。

「あふうンッ」

少女は華やいだ、どこか甘つたれた鼻声をあげる。

ほとんど何も知らないオトコに純潔を奪われ、いいように犯されるのは本来、気持ち悪く、おぞましく、けがらわしくてたまらないハズだった。事実、小雪は嵐の夜に、巢から放り出された雛鳥のようにおびえていたが、ただ、恐怖と不安に満ちた感覚に苛まれているばかりではなかった。下呂井からもらった葉のためか、肉体カラダが不思議に熱く、そればかりか奇妙な晴れがましさ、喜びがあつた。

それは、憧れのお姫様と同じような悲惨な目にあえるという、倒錯した、選民意識エリートだった。

「うふうンン……ッ♡」

甘ったるい鼻声を漏らす少女の翳かげりは淡く、まだ生え始めたばかりだった。

その柔らかな春草の感触を顎や頬で味わいながら、下呂井は少女の裸のお尻を撫で、こすり、

さわさわッ。

ゆっくりと下肢を広げていく。

「あ……ッ」

小雪は戸惑い、ためらいがちではあったが、下呂井のなすがままになっていった。

下呂井の行動、その指と舌、それに吐息が秘めやかな部分に近づいてくると、さすがに気恥ずかしいのか、体を強張らせてしまうこと幾たびかあったが、下呂井が二度、三度と抱擁と口づけで促すと、しだいしだいに緊張を解いてゆき、その行為を受け入れていく――。

ついに、下呂井の舌尖が小雪の最も敏感な部分、淡い翳りの下に刻み込まれた縦一筋の、肉の合わせ目に触れた。

「ヒあ……ッ！」

小雪は小さな悲鳴を放った。

そんな少女の不安を和らげるように、あるいはさらなる恐怖を煽るかのよう、下呂井は唇と舌を使い始める。

ぺちよぺちよッ。

「あ……ッ！ ああん……ッ！」

びくびくッ。びくびくッ。びくびくンッ。

半裸にされた少女の、か細い肢体が、喫茶店の個室のテーブルで大きく、小さくのたうち、わななき、^{フル}慄える。

ぴちやぺちよッ。

下呂井は丹念に、そして丁寧ニに少女の肉の合わせ目に口づけし、そして舌尖ニに力をこめて押し広げていく。

ぴちやッ、くちよッ、ぴちやぴちよッ。

下呂井の舌は小雪の固く縮こまった肉の合わせ目、秘めやかな割れ目をなぞるように舐めしやぶり、時には舌尖ニでほじくるように、くすぐるようになっていらいまくる。

ぴちやぴちやッ。くちゆくちゆッ。

「あああ……ッ」

(わたし……ッ、わたし、見られちゃっている……ッ)

自分以外の人間に触れられるだけでなく、小雪自身よく見たコトのない箇所トコロが見られているという思いが小雪の感覚をさらに鋭敏にさせ、反応を機敏にさせた。そして「見られている」「触られている」という思いに、小雪の体奥が熱くなり、甘く疼ウズきだしてくる。

未知の感覚に急き立てられるように小雪は、おずおずと、おずおずと緊張を解いてゆき、お臍へしから下の力を抜いていく。愛らしい縦長の窪みが刻まれた、少女のなめらかな腹部はらがヒクヒク、ヒクヒクとのたうつ。

少女の秘裂クレバズは、下呂井が想像したよりも簡単に解ほどけてゆき、ほころんでは、その奥から汗ばむようにして果汁を沁み出させてくる。

ぴちゃぺちよッ。

下呂井は少女の秘蜜を舌先にすくい、舐めしやぶりながら、おのが分身を痛いくらい滾タギらせていた。そこに血が集まりすぎて、貧血になってしまいそうだった。なのに鼻血が出そうなくらい興奮し、心臓が破れそうなくらい大きな脈を打っていた。

下呂井はさらに舌尖に力をこめ、少女の秘めやかな亀裂を押し広げ、分け入って

く。

「あ……ッ、あああ……ッ」

少女の幽かすかな悲鳴は嫌悪や拒絶を意味するものではなく、戸惑いやおののきの表明であり、さらには承認や誘いの成分が多く含まれていた。

ぴちゃぴちゃッ。

下呂井は舌先に力を込めて、少女の秘腔をほじくると、一転してその天井、左右の肉襞が合わさっていく箇所トコロを奥から前、前から奥へと舌でなぞりまくる。

ぴちゃぺちよッ。

「ひあああ……ッ！」

小雪は全身を弾ませるようにならせながら、今までとは違う悲鳴を放った。
がくがくッ。

少女の華奢な肢体がわななき、肉付きの薄い全身がフルえる。

それははつきりと快感だった。

その証拠に、下呂井がいらいまくっている箇所の頂き、下呂井の鼻先にある部分が尖り、恥ずかしがりながらも存在を示してくる。

クリトリスだった。

下呂井はその、初めて充血したような肉の真珠を鼻先や舌でくすぐりながら、そつと口に入れ、優しく優しく噛みしゃぶる。

くちやくちやくちゅちゅッ。

「あ……ッ、ああンン……ッ！」

びくんびくん、と半裸の幼い肢体が大きく小さく波打ちながら、のたうつ。

その少女の反応は完全に誘いだった。

もう下呂井は辛抱できなかつた。

自分の分身がいまだかつてないほどまでに熱く、固く激しく怒張し、邪魔にすらなっているのを感じながら手早くスラックスと下着をいっしょに脱ぎ、おのが欲望を解放する。下呂井のイツモツは本当にまるで鉄でできたかのように固くなり、火傷しそうなくらい熱くなっていた。

(さあ、ヤルぞ)

暴行の意図もあらわに、下呂井は身を起こした。そして今から犯そうという、勤め先の学校に通う、中等部3年の女子中学生の姿を見た。

!!!

美しかった。少女は息を呑むほどまでに美しく、可憐であり、キレイだった。

濃紺のブレザー、純白のブラウス、赤く細いネクタイ、白と黒のタータンチェック柄のミニスカート、それに膝下丈の黒いニーソックス。それらが少女の裸体を飾り、『触れなば落ちなん』という風情をいつそう強調している。きめ細かな白い肌が紅潮し、まるで少女自身が一輪の花であるかのようなたたずまいだった。

恥ずかしさと恐怖から片腕で顔を隠し、さらに仰のけにそむけているのが痛々しくもあり、また何とも言えず、愛おしかった。

下呂井は小雪の両脚の間に自分の体を入れ、覆いかぶさってきた。

「あ……ッ！」

ついにその時が来たのを悟った少女の紅い唇から短い悲鳴が漏れる。

「好きだよ、小雪ちゃん」

下呂井はそうささやいた。

「……………？」

そんな下呂井に小雪はさも不思議そうな視線を送る。その所以ゆえんを下呂井は悟ったが、もはやそれ以上何も言おうとはしなかった。言えなかったのかも知れないし、不要だと察したのかもしれない。代わりに行動に移す。

下呂井は慎重に自分の欲望の先端を、少女の秘めやかな部分、その肉裂クレバスに押し当て

た。

ぶるぶるッ、がたがたッ。

「こ……ッ、こわい……ッ」

果たして小雪は震えながら恐怖を口にしたが、それ以上抵抗しようとはしなかった。逆らっても無駄だと悟っていたのかもしれない。

ぐんッ！

下呂井が腰を突き入れた。

「ひッ！」

小雪は小さな悲鳴を放ち、全身を引き攣らせ、ソコを強張らせた。

下呂井は小雪の細い腰、その背中に腕を回して抱き上げた。

少女の腰が浮き、下肢が広がる。そこに下呂井はおのれの欲望を突き入れた。

ぐしゅんッ。

下呂井の腹部の下、欲望の先端で少女の柔らかな肉が裂ける感触がした。

「ひぐうッ！」

下呂井の下で女子学生が哭なきもがいた。

しかし、もはやその感触と呻きは中年男の欲望を掻き立てるモノでしかなかった。



下呂井はさらに自分の体を女子学生の下肢の間に沈め、おのれの欲望を突き立てる。
ぎちッ、ぎちぎちッ。

「い……………ッ、痛い……………ッッ！」

小雪は呻き、泣きながら、先ほどまで以上に、しなやかな肢体を強張らせ、アソコを縮こまらせてしまう。

(い……………ッ、痛い……………ッッ！)

涙をにじませつつ、未熟な肢体をもがさせる少女のかすかな胸のふくらみを揉むのではなく、さするかのような優しい、ソフトタッチで触れ、撫でてくる。

びくびくくッ。

「あ……………ッ」

股間から脳天に突き抜ける激痛がかすかにやわらぐ。

破瓜の激痛にあえぎながらも、優しい愛撫に反応してしまう少女に下呂井は、耳元に唇を寄せた。

「好きだよ、お姫様」

(え……………?)

戸惑いながら、小雪が緊張を緩めた次の瞬間、下呂井はおのれの欲望の切っ先を少

女の秘めやかな肉の合わせ目にさらに深く突き入れていた。

ぐしゅんッ！

「ひがあッ！」

大粒の涙をこぼしてあえぐ少女に下呂井はさらに自分の分身をネジこんでいく——。ぴきぴき、びぎびぎと少女の秘肉が裂けながら、下呂井を包み込んでいく。それはたまらない感触だった。下呂井は少女が味わっている破瓜の激痛を知りながら、おのれの欲望を止められなかった。

ぐじゅんッ！！

とうとう下呂井はおのれの欲望のすべてを少女に突き入れてしまう。

（あああ……ッ、あああ……ッ）

ふるふるッ、ふるふるッ。

ロスト・バージン

処女喪失の衝撃と激痛に泣きあえぐ少女を下呂井はさらに責め立てていく。下呂井は小雪の細腰の背中に腕を回して、抱きかかえるようにして、華奢な肢体を抱え上げ、さらにその細い両脚を両肩に担ぎ上げた。そうして、腰を前後に動かし始める。

ぐぢやぐぢやッ。ぶちぶちッ。

「あああ……ッ！ い……ッ、痛い……ッ！ センセエ、痛いの……ッ！」

切り裂かれた傷跡をさらに鈍器で抉られ、ホジくり返されるような激痛に半裸の女子中学生は声を放つて哭いた。

しかし、下呂井は止まらない。止まるはずなかった。長年ためるだけため込んでいた暗い獣欲の赴くままに、おのが分身を遮二無二、幼い肉体、その奥底にブツけていく。

ぎしゆぎしゆッ。

粘膜と粘膜がコスレあい、熱を帯びながら、コワレて、ひとつになつていく――。

「ひいッ！ ひいひいッ！」

いまや少女の金切り声まじりの悲鳴も、中年の男性教師の欲望をさらに掻き立てるものでしかなかった。

がしゆッ、がしゆしゆッ！

下呂井は本能の赴くままに、腰を突き出し、少女に肉槍を突き立て、抉り、その深奥を貫き、打ちたてていくばかりだった。

「ああ……ッ、あああ……ッ」

涙を途切れることなく流し、あえぎ泣くばかりの小雪は、オンナの、男に犯される運命にある者の本能に従い、全身から力を抜いて、ただただ、この暴虐の時間が過ぎ

ゆくに身を任せるだけだった。

「あああッ、いいよ。小雪チャン。キミのオマ○コはサイコーだ」

熱病患者のうわごとさながらに、下呂井は呻き、腰の運動をさらに力強く、激しくしていく。

ぎゅちゅッ。ごゅちゅッ。ごしゅしゅッ。

「ひいッ、ひぎいッ」

小雪は幼い肢体に大量の汗をしぶかせ、涙だけでなく、鼻水さえこぼしながら、あえぎ泣いて、耐えるしかなかった。

そんな少女の忍従の姿を見ながら、下呂井は少女の深奥に自分の肉槍を繰り出し、自分の歪んだ性欲をさらに高ぶらせていた。

がしゅッ、がしゅがしゅッ。ぎちゅッ、ぎちゅちゅちゅッ。

「うふッ♡ イクよ、小雪チャン」

（あああ……ッ）

小雪は、ソノ時が来たのを悟った。しかし、小雪は何も言おうとはしなかった。もちろんうなずきはしなかったものの、何を言っても無駄だと悟っていたのかもしれないし、また自分の本心に薄々だが気づいていたのかもしれない。

果たして、下呂井はさらに小雪の深奥に自分の欲望を叩き込み、
がしゅがしゅッ。

さらにソコをホジくるようにネジこみ、
ぐりぐりッ。

「あぐう……ッ！」
突きイレル——。

ぎちぎちッ。ぐちぐちッ。

あまりの激痛に、小雪は条件反射的に下呂井オトコを締め付けてしまい、最後の時を誘発
させてしまう。

ぎゅうううッ。

「ああ……ッ、スゴイよ、小雪ちゃん」

下呂井はそう呻くのがやつとだった。そして最後の突き込みを繰り返して出し、おのが欲
望をブチまけていく——。

どぴゅッ。どぴゅどぴゅッ。どぱんんッ！

「ひぐうッ！」

小雪は自分の肉体の最も奥深い部分に、熱い滾りが迸るのを感じた。

小雪は自分が少女でなくなったのを悟った。悟らざるを得なかった。

「あああ……ッ、あああ………ッ」

しかし、少女の受難はコレで終わったわけではなかった。

下呂井は長年鬱積していたおのが欲望の赴くままに少女を犯し、辱め、蹂躪し始めたのだ。

具体的には下呂井は少女の体におのれの欲望の滾りを四度に渡って叩きつけて犯しまくったのだ。

二度目はテーブルを両方の膝の裏で抱え込むような大股開きの正常位で犯した。

喫茶店の個室にある、黒いテーブルの上に白い腹部を見せて仰のけに寝そべった少女はまるで解剖されるカエルさながらだった。完全に無抵抗になった少女を下呂井は最初と同じ激情と、最初を上回る執拗さで犯しまくった。

ずんずんッ。ずこばこッ。ずんずんッ。ずこばこオッ。

「あぐう……ッ。痛い……ッ、痛いの……ッ、センセエ……ッ、痛いの……ッ！」

破瓜の鮮血を流しながらあえぎ泣く少女の訴えに下呂井はさらに劣情を昂^{たかぶ}らせ、犯しまくった。

(うふッ、うふうふうふッ)

どばどばどぶぷッびゅびゅんッ。

三度目は紺色の制服をまとつたままの半裸の身を半回転させ、テーブルにうつぶせに押さえつけ、未熟なお尻を叩きながら背後から貫いた。

ずんずんッ。ずこばこッ。

ばんばんッ。

きゅッ、きゅきゅきゅッ。

「あああ……ッ、あああ……ッ」

下呂井が平手打ちするたびに、内股になった、破瓜したばかりの少女の狭穴は窄まり、下呂井のモノをきゅうきゅう締め付ける。少女の涙ながらにするあえかな泣き声も下呂井の狂おしい情感をさらに高めるモノでしかなかつた。下呂井は嗜虐的な欲望をいっそう掻き立て、さらに腰の動きを激しくし、情熱を傾けて突き込みを鋭くし、ぎゅっぽッ、なっぷッ。ちゅつくッ。ざっぷッ。

少女の最奥でのネジ込みを力強くする。

ぐりッ。ぐりぐりぐぐぐッ。

「ひいッ！ ひいひいッ！」

ロスト！ パーজন

想像しなかった処女喪失に続く、さらなる凌辱に小雪は魂を飛ばして哭いた。小雪はあまりといえばあまりの衝撃と激痛に意識すら失いかけていたのかもしれない。そんな、半ば気絶状態の少女を下呂井は下卑た笑いを浮かべながら、ただひたすらに犯してゆく――。

ミドルティーンの少女の小さな丸いお尻を叩きながら、スパンキングス

ばんばんッ。ばんばんッ。

少女の秘腔におのが欲望を勢いよく出し入れし、

ずんずんッ。ずこずこッ。ずんずんッ。ちゅこちゅこッ。

「きひい……ッ。あぐう……ッ」

おのれの情感を高めて、

「ぐふッ♡ イクよ。小雪チャン。イクからね」

イヤらしく喘い、ささめきながら、一方的に勝手な欲望を遂げる。

どぼどぼびゅびゅびゅッ。

「あぐ……ッ」

小雪はオトコの三度目の熱い迸りを最奥に感じながら、悶絶してしまう。

精も根も尽き果て、魂の抜け殻になったような小雪に対し、下呂井は背後から繋がったまま羽交い締めにし、そのままの格好で大きなボックス席に倒れ込むように座りこんだ。

どかッ。

「あごお……ッ」

子宮底から脳天へと響き貫く痛撃に小雪は鼻水を垂らして呻いた。

ぎちぎちッ。

肉体の奥底、オンナとして最も大事な部分キシが軋む。

「あああ……ッ、あああ……ッ」

オトコに蹂躪され尽くした秘奥が悲鳴をあげてのたうつ幼い女学生の下肢を目いっぱい割り広げながら、下呂井は再び背後から突き上げて犯し始める。

がっしゅッ、ごっしゅッ。

「あごおお……ッ！ ひ……ッ、い……ッ、痛ヒガい……ッ。痛いよおう……ッ」

処女を失ったばかりの少女の最奥を突き上げながら、

ずんずんッ。ちゅこちゅこッ。ずんずんッ。じゅこじゅこッ。

下呂井は幼い胸のふくらみを揉み回し、その薄い胸板をイジくり回しながら、背後からその耳元をねぶりまわし、

ぴちゃぴちゃッ。ぺちよぺちよッ。

少女に服従と忍耐、隷属を強要する。

「いいかい、小雪チャン。白瀬クン。キミはボクの患者なんだ。二度と万引きなんかしないように、治療してあげるからね」

「はい……ッ。はぎい……ッ。わ……ッ、私は、センセエの患者です……ッ。どうか、二度と万引きなんかしないように治療してください……ッ。ですから……ッ、ですから……ッ。ああ……ッ！ 痛い……ッ！ 痛いんですッ！ センセエ……ッ。もう、許して……ッ！ 勘弁してください……ッ」

少女の涙交じりの哀訴に、下呂井は酷薄そうな嗤いを閃かせた。

それは思春期を迎えてからずっと、長い間隠し持っていた歪んだ欲望の表出だった。ひよつとしたらこのままずっと、抑圧したまま消えてしまう運命であったかもしれない、隠れた歪んだ欲望が、少女の屈折した願望に触発されて現れたのかも知れなかった。

可愛らしい少女の嘆願に、下呂井はかぶりを振り、背後から耳たぶに噛みついた。

かぷッ。

「ああ……ッ！」

びくんびくんッ。

あまりにも早すぎる、そして思いもかけなかった処女喪失ロスト・バージンの激痛と失意にのたうつ小雪は新たな痛みに全身を縮こまらせる。

そんな可憐な女学生の骨細の華奢な肢体を背後から抱きしめ、その淡い胸のふくらみを手いっぱいを使って揉みしだきながら、下呂井は口に唾くわえた耳たぶ、その溝をほじくり返す。

「ダメだよ。小雪ちゃん。いくら読みたいからって、イヤらしい変態本を万引きしちやうよな」

下呂井はそこまで言いさして、言葉を変えた。

「そんなイヤらしいお姫様は、キチンと治療してあげなけりやあ、いけないからね」

!!!

がくんがくんッ。

やはり『お姫様』という効果は抜群だった。その言葉は少女にとって、劣等感コンプレックスと憧れが一体になったような意味を持ち、重要なキーワードになっていようだった。

果たして少女は、その花の蕾のような小さく可憐な唇を開いた。

「あああ……ッ、あああ……ッ」

小雪は眉宇を顰め、懊悩するように泣きながら、滂沱ぼうたの涙を流しながら、全身でうなずいてみせた。

「は……ッ、はいい……ッ。はぐうう……ッ。わ……ッ、私は、センセエの患者です……ッ。どうか……ッ、もう……ッ、もう、二度と万引きなんかしないように治療してください……ッ」

「ずんずんッ、ずこずこッ。じゅこじゅこッ。」

涙を流し、しゃくりあげながら諦念の泣訴をする少女を下呂井は背後から突き上げながら、おのれの快感を貪る。

「くああ……ッ！ 痛い……ッ！ 本当に……ッ、本当に、痛いんですッ！ センセエ……ッ。もう……ッ、もう……ッ、ガマンできない……ッ！ ほんとうに、カラダが……ッ、バラバラになりそう……ッ。頭が……、どうにか……ッ、おかしくなっちゃいそうです……。もう……ッ、これ以上は……ッ、勘弁して……ッ、許して……ッ、勘弁してください……ッ。あああ……ッ！」

そこまで言った小雪は今味わっている激痛から逃れようと、言ってはならない台詞

を口にしてしまう。

「あ……ッ、あああ……ッ、明日あしたから……ッ、明日から……ッ、センセイの所に行つて治療を受けますから、今日は……ッ、今日のトコロは……ッ、勘弁してええ……ッ。ゆ……ッ、許してください……ッ。明日からなら、わたし……ッ、また……ッ、我慢しますから……ッ」

ひいつぐッ、あぐうッ。

「本当かい？」

少女の思いもかけなかつた申し出に、下呂井は会心の、そして悪魔めいた笑いを浮かべた。

ずんずんッ、じゅこぼこッ。ずんずんッ、じゅこぼこッ。

「はい……ッ。はぎいヒ……ッ。ほ……ッ、本当です……ッ。明日あしたから……ッ、明日からなら……ッ、わたしは、センセイの所に行つて治療を受けますから、今日は……ッ、今日のトコロは……ッ、もう……ッ、もう……ッ、勘弁してええ……ッ。ゆ……ッ、許してください……ッ。明日からなら、わたし……ッ、どんな治療でも受けま……ッ。我慢します……ッ」

ぐすぐすッ。

「よおし、いいだろう。その言葉を忘れるんじゃないぞ」

「はい……ッ。はぎいヒ……ッ」

がくがくッ。がくがくッ。

「ふふふッ、いい娘だ」

そう言っつてうなずくと、下呂井は背中から小雪の左右の膝裏を左右の手で掴んで持ち上げる。

がくッ。ぐしゅしゅんッ。

小さな小雪の体が下呂井の体に沈み込み、オトコの欲望をさらに深く迎え入れてしまふ。

ぎぢぎぢぎぢぎぢッ。

小雪は自分の体の一番奥がひしゃげるのを感じた。

「あ……ッ……ッ！」

半裸の身に紺色ブレザーと純白のブラウスをまといつかせたままの女子学生は吼えるように呻き、大粒の涙を新たに吹きこぼした。

「い……ッ、い……ッ」

ぶるぶるッ、わなわなッ。

今にも氣絶しそうな痛みに、小雪はあどけない面差しを涙と汗ばかりではなく、鼻水とよだれにまみれさせてしまう。

半ば失神状態の女子学生の耳たぶや、頬、目尻などを美味しそうに舐めしゃぶりながら、下呂井は腰を使つて、小雪を揺さぶりあげる。

「ずんずんッ、ずこぼこッ。ずんずんッ、ずこぼこッ。ずんずんッ、じゅこぼこッ。じゃあ、明日からボクの所にくるんだよ。たっぷりと治療して、もう二度と万引きなんかしないように治してあげるからね」

「は……ッ、はヒい……ッ、明日から……ッ、センセイのトコロへ行つて、二度と万引きしないように治療されます……ッ。治療してもらいます……ッ。ですから……ッ、ですから……ッ、もう……ッ、許して……ッ、勘弁してください……ッ。明日からなら、わたし……ッ、また……ッ、我慢しますから……ッ」

「よしよし、良い娘だ。良い娘だ」

あやすように、あるいはバカにするかのようにそう囁くと、鬱屈し歪みきつた欲望を隠し持っていた中年の男性教師はおのが欲望を解放していく。

「ずんずんッ。ぢゅこぼこッ。ずんずんッ。ぢゅこぼこッ。」

「ひいん……ッ、痛いよう……ッ、苦しいよう……ッ！ お父さん……ッ、お母さん

……ッ、助けてええ……ッ」

ついにこの場にいない両親に助けを求めだす少女のオンナに、下呂井はしたたかに、おのが欲望をブチまけていった――。

「あああ……ッ、ああああ……ッ」

ぶるぶるッ、わなわなッ。

小雪は自分の肉体の奥で男の欲望がわななき、その先端から熱い滾りが噴出して、くのをはつきりと知覚し、自分が昨日までとは違う存在に成り果てたのを悟った。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!

ヴァルキリー

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille
ミルフィーユ

<http://www.mille-feuille.jp/>

モバイル二次元
ドリーム

<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!